忘れちゃならないモノがあるから、
昔のあの連載が忘れられないウチに
戻ってきました！

道路好路 ど～ろこ～ろ スペシャル版

忘れないために、声を見る。

忘れてしまった方、初めてみる方も多いかもしれませんね。数年前に度々連載していた歴史ゆかりの地を歩く「道路好路（ど～ろこ～ろ）。当時は若い女性二人の掛け合い設定でした。でも今回は違います。

昭和44年生まれの、54歳女の一人旅でございます！

黒塗りの校歌

昭和57年12歳、中学校に入学。まず校歌ならいますよね？でも歌詞に黒マジックで消された部分がありました。3番は今の大牟田にそぐわないので歌わないように、との指示。マジックを透かしてみますよそりゃ。『あすの炭都を担いつつ　栄光ある祖国築くもの』…。のち大人になって8歳年下の同僚に聞いてみたところ、彼女の中学校でも同じようなことが！『資源は深く地下に満ち　工場伸びて行くところ』はい、これも禁じられた3番でした。他の学校のことは知らないけど、なぜ歌わない？なぜ隠す？わたしたちの大牟田は炭坑で栄えたまちでしょ？え…

隠すってことはウシロメタイ事でもあるの？

というモヤモヤを解き明かすべく、今は復活した松原中の3番と、まばゆい世界文化遺産と化した、教えられなかった自分の育った炭坑町のウラを知りたい…と思い至った54歳現在。ふと流行のダークツーリズム気分で歩いてみることにしました。膝にくるから車にも乗ったけど。

知らなすぎる！いい歳してるのに自分の故郷を異常に知らなすぎる！これはたぶん私が怠けてたんじゃないと思う多分…なんたって郷土史クラブにはいっていた位だもん！これはアレだ、聞いてなかったんだ！聞かされてなかったんだ！でも昔は見えてなかったものが見えて、隠された歌も耳に入るかもしれない。

炭坑で労働といえば、牢獄のシンボル・ケンさんの網走刑務所が頭に浮かびますが、今や北海道では空知集治監や樺戸集治監も整備されマンガの聖地として沢山の観光客が訪れているそうで、「監獄」の缶バッチやグッズも販売されています。いやいや、西日本に唯一の集治監がありますよ、わが故郷大牟田にも！

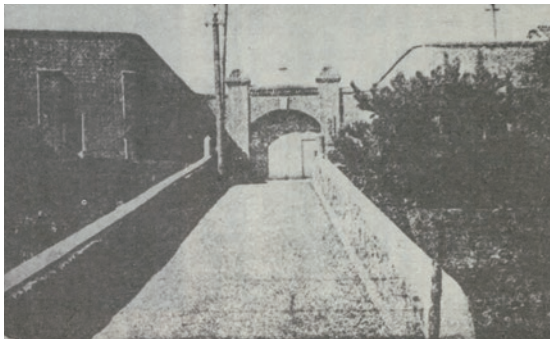
後世塗られたモルタルがはがれ、監獄だった頃の赤煉瓦がのぞく三池工業高校の外塀（県指定有形文化財）

三池集治監（みいけしゅうじかん）

大牟田市上官町4丁目

息子が福岡県立三池工業高校に入学する時、初めて中から見る巨大なレンガ塀はかなり威圧的に感じ、かつてここが大きな刑務所で、受刑者が炭坑で働いていたこと位は知っていましたが、明るく元気な運動部の声とのギャップに驚きを禁じ得ませんでした。そういえば故郷なのに炭坑のことは何も知らないな…と思い少し学んでみることに。

明治初期の維新政府の『殖産興業』と『富国強兵』の命題のもと、石炭産業が重要視されていましたが、当時の採炭夫は農家が多かったために農繁期には仕事に来ないという不安定さに、採炭作業はとても危険で、野蛮だと悪評も広まり、炭坑での人手不足が深刻になりました。そこで投獄されている囚徒を働かせることになりました。



明治の三池集治監

現在（2024年）の三池工業高校
左側の石垣は当時のものがそのまま残っている

三池の石炭は大牟田で一番有名な夫婦であろうあの挿絵の伝治左ヱ門が発見して以来三池・柳河藩が採炭していましたが、明治6（1873）年に官営となり、その時すでに近隣の県からの囚徒に採炭させていましたが、北海道に続いてまさに鉱山労働だけを目的としたような三池集治監―国立の大規模刑務所が明治16（1883）年に開庁し、主に西日本から囚徒が集められ明治21（1888）年には1500名を越えました。明治22（1889）年に三井財閥に払い下げられ民営化しても集治監から囚人労働も引き継がれ、さらに増大し、三池炭坑で採炭労働をするなかの実に69％が囚徒によるものになっていました。

あたかも屠處に牽かるる子羊の憂い。

放免囚 高橋長蔵『生命の洗濯』より

採炭作業は危険かつ重労働なうえに、食料、換気、衛生などの労働環境が劣悪を極め、それが囚徒達の心をさらに荒ませ、事故や病気の他に不穏な事件での犠牲者も多く見られ、あげく銃を持つ監視に見張られるまでになっていきました。見出しに書いたように心身共に地獄と化していったのが想像できます。

気になったのは違反の懲罰のなかに「懲罰減食」という食事を減らされるものがあり、微罪でもかなり懲罰減食を受けています。そしてこれで余った米（官給米）を売っているんですね。この売上高が三池集治監は特に多い。並んだ公式の数字は個人の横領とかじゃなく、企業の体質を体現しているんじゃないかと怪しんでしまいます。

閉庁する昭和6（1931）年までのおよそ半世紀の本や資料を見ていると、さらにあのレンガの赤さが目に重く映ってきます。

人道と正義を叫んだ医者がいた

三池集治監囚人の不幸之れより大なるはなし。

そんな重い気持ちに光明が！国も典獄（集治監トップ）も会社の利益に沿うような雰囲気の中で、医員だった菊池常喜がその死亡率や疾病率の高さから医師としての良心の叫びとして三池集治監の閉鎖を訴えました。しかし物議をかもしたものの握り潰され、菊池医師は去って行きます。この話はかの水俣訴訟での勝訴の決め手となった自社責任の証拠を命の尽きる間際に証言したチッソ付属病院の細川一医師を思い出させ、心が少し温かくなりました。

宮原坑（みやのはらこう）跡

大牟田市宮原町1丁目

修羅坑―しゅら坑―聞いていますよ、苛烈さゆえにそのあだ名で呼ばれる宮原坑。日清戦争後の熱も冷めやらぬ勢いの中、最も多く厳しく囚人労働が行われた坑。お年寄りの口からよく聞いていた話は、朱色の囚人服を着て、すっぽり藁笠かぶってジャラジャラ鎖でつながれて背中を丸めて地の底ふか～く潜らすとばい、ほんなこつ修羅ばい…、と。ちょっと勉強した今は三池集治監から程近い宮原坑へ囚徒が出役している姿が語りつがれたものだと思われます。気になりました。どこの道を通ったのだろうか？

知らない私が聞くぐらい大牟田ではメジャーな談話ではなかろうか、なぜこんなに語られる？

色々気になったのでまずは大牟田市立図書館に行って聞きました。山田館長から大正15年の地図をいただき、「有力だと言われているルート」を教えてもらい、いざ宮原坑へ！

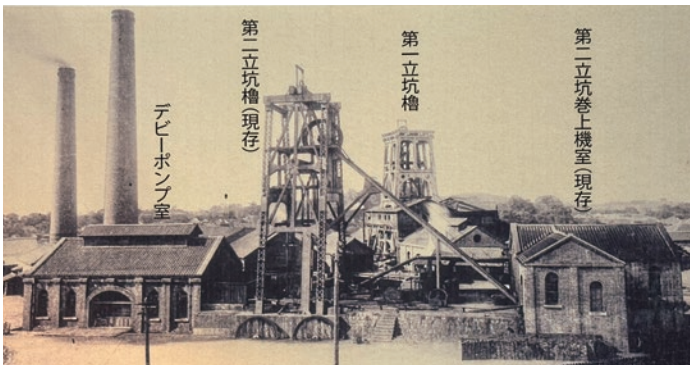
宮原坑で現地のボランティアガイドさんに色々聞きました。今立っている立坑やぐらは第二立坑であり、その先には第一立坑が立っていたこと、この第二立坑は囚人のみが使用していて、良民坑夫（一般の人）や資材は第二立坑を利用していたこと。そのために宮原坑の建物内や地下には壁が作ってあり、囚徒と良民坑夫が接触しないようにされていたそうです。

ノロノロ歩いて20分弱程で三池集治監、今の三池工業高校のネットが見えてきます。でも入口があったと思われる南側の塀は取り壊されて、瀬戸際まで民家が建っているので実際の出入り口は確認することが出来ませんでした。

宮原坑まで帰ってくると、別のボランティアさんから「ちょっと怪しいところがあるとよ。四つ角のところで囚人と一般人が交わってしまうやろが。それは絶対でけんけん。俺は立体交差しとったと思うとよ。ちょっと低くなっとる」と問題発言が！

囚徒道を歩いてみた。

地元民はシュトドウと呼んでいます



キミしゃ〜ん

帰宅して資料を読んでみると、確かに**当初は一般人と交わって出役していたが、それじゃまずかろうということで『囚人橋』を集治監の南側につくった。**という記述があった！ 発見に至らず。

同じ時、その方から「わからん事があったら野田さんって駄菓子屋が詳しかけん聞いておいで、ホレいってらっしゃ〜い」と背中をたたかれました。行きましたよ。お店あいてるのかな？と思う佇まいでしたが、おばあちゃんが出入り口にいらっしゃったので声をかけました。ご主人(90)の母親・キミ子さんが囚徒道の角で軽食や菓子を売っていて、よくその頃店の前を通る囚徒の話しをされていたそうです。「あん人たちゃニコニコしてね、義母にって手ば振らすげな。お義母さんも楽しかったごたるよ」と野田さん。そして汗だくで鼻水まで出してる私に「がんばってね」と冷えたジュースを握らせてくれました。どうしてこんなに親切にしてくれるのかという問いに「奉仕の心たい」と満面の笑みで手を握ってくれました。

この修羅と呼ばれた場所で、当時もやっぱりそこで生きているもの同士楽しい一瞬や優しい時間が存在していたんだ！そしてそれは今もこの町に生きているんだ、と感激しました。

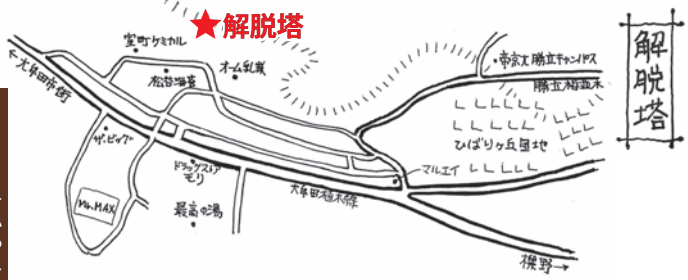
キミ子さんがどれ程人の心を照らしたか！

解脱塔（げだつとう） 大牟田市新勝立町1丁目

明治21(1888)年に三池集治監官吏の手によって建立。このあたり一帯は集治監用の墓地として使われていた記録があります。ただ、平成の造成時に遺骨が大量に積み重なって出たため、その埋葬方法に疑問や非難が起こっています。解脱塔の横に地蔵があり、その下のたて穴(井戸という表記もあり)には仮埋葬後に白骨化したものを投げ込んでいたのでは、という説もあります。写真の解脱塔は荒廃し崩壊寸前だったものを囚人墓地保存会の努力で平成7(1995)年に再建されたものです。

また解脱塔の横には前述した菊池医師の功績を称える文が刻まれた石碑も胸をうちます。

遺骨が入っていたと言われる穴の蓋



集治監廃止を叫んだ菊池医師を称える碑

倶會一處（くえいっしょ） 石碑 大牟田市米生町1丁目

権現山と呼ばれる宮原坑の脇にある小山の竹林を分け入れば、いくつかの墓石に遭遇します。諸説ありますがここも囚人墓と言われているひとつです。その中のひとつには倶會一處という「死んだら一所にあつまる」という意味の仏語っぽい漢字とどーんと大きく三井のマークが刻まれた石碑が目に入ります。危険

倶會一處の文字と三井のマーク

な現場で働く囚徒の間では「死んだらあかつち山行きぞ」と言われていた話しが残されています。ちなみにこの権現山は赤土です。

山頂に登れば地蔵がずらりと並んだ光景が印象的な福寿院という真言宗のお寺さんがあります。ここを開いた僧は三池集治監の元囚徒で大変慕われていましたが、偽名を使った岡山の人だったので、供養するのにも苦労したという逸話が残されています。

福寿院に並ぶ地蔵が信望の篤さを物語る

合葬之碑（がっそうのひ）

熊本市黒髪2丁目
熊本大学工学部南側

熊本大学工学部と白川河川敷に挟まれた小さな敷地に熊本刑務所墓地があり、その中のひとつに「三池刑務所在中死亡者二千四百六十八名　昭和九年三月建立」と書かれた石碑があります。三池集治監は明治39（1906）年に「三池監獄」、明治41（1908）年に「三池刑務所」と改称。昭和6（1931）年4月に廃止されたのち熊本刑務所に引き継がれた時に大牟田にあった合葬之碑

熊本刑務所之廟のなか

もあわせて一本化されたのではないかと言われています。

一ノ浦囚人墓地（いちのうらしゅうじんぼち）

大牟田市一浦町

昭和44（1969）年に私は生まれました。この大牟田でもうひとつ生まれたものがあります。この取材を通して知った「大牟田囚人墓地保存会」です。

教えられなかった事を教えてくれました。少し聞きかじったことの奥を見せてくれた『同級生』でした。

この一ノ浦囚人墓地も写真では見た事がありましたが今回の取材で直に目の当たりにすると胸に迫ってくるものがあります。この石の柱が囚人墓地ではないという意見があることも知りました。でも気持ちが揺れることは無い寂寥の迫力に言葉が出ません。

自然と手を合わせていました。

『同級生』である大牟田囚人墓地保存会は去年で解散してしまいました。

私は見ること、聞くこと、書くことで少しでも自分のふるさとのことを

伝えていく手伝いが出来るならば…と思いました。

この取材中にもう一人の『同級生』と出会いました。40年ぶりの再会です。

彼はお墓参りに大牟田に帰郷していたところでした。

彼の家のお墓は一ノ浦墓地にあるそうです。

彼の両親は、自家の墓にお参りした後に彼と姉を決まって寂しい敷地の片隅につれていきました。そこは昼でも薄暗くて草が生い茂り、なんだか判らない石の柱が地面に突き刺さっていたり転がっていたりして、子どもの心には少し怖かった記憶があるそうです。

そんな姉弟の手のひらにお母さんは線香をにぎらせ、拝むようにうながしました。毎年、毎年。

この『同級生』がしてきたことを、もうひとつの『同級生』のために、せめて伝えることがしたいと慣れぬペンをもちました。

校歌の一文を消さなきゃいけないような歴史でも語ってつないでいかなければいけないな、と思いました。

名前もわからんで
故郷にも帰られんで
大牟田のために
働いた人たちばい
ようと
拝まやんとよ。

参考文献
三池炭鉱発展の礎石 囚人墓地とその関係遺跡
鎮魂 歴史探訪 負の遺産
霊よ、安らかに ―三池炭鉱囚人労働写真集―
※大牟田囚人墓地保存会
新大牟田市史 資料編
大牟田市史 中巻
※大牟田市

取材協力（敬称略）
大牟田市立図書館
大牟田市石炭産業科学館
宮原坑ボランティアガイドスタッフ
野田商店
ありがとうございました。